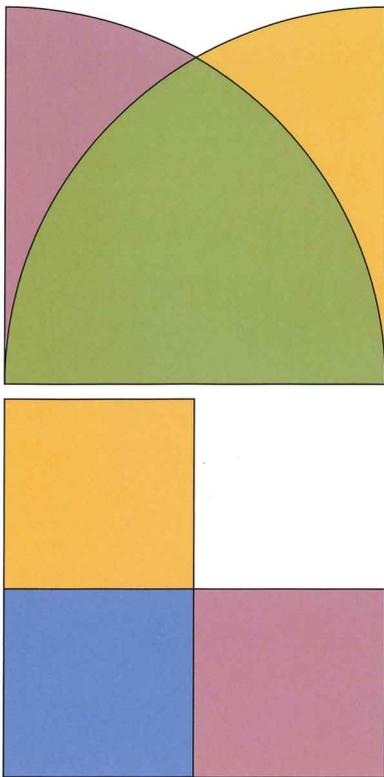


学習院大学史料館

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of HistoryMuseum Letter
No.38

発行日 ● 平成30年(2018)9月1日

もくじ

ごあいさつ	1
明治天皇の信頼と乃木希典の院長就任	2
学び舎での寄宿生活と学生への訓示	3
片瀬游泳場における夏期游泳と天幕生活	4
英国王戴冠式随員と各国学校視察	5
中朝事実：昭和天皇に受け継がれた教え	6
明治の終焉と乃木希典が遺したもの	7
現存する乃木院長時代の建造物マップ	8



乃木希典所用剣道防具 [学習院アーカイブズ蔵]

ごあいさつ

学習院大学史料館では、9月13日(木)～12月1日(土)の期間に、「学び舎の乃木希典」として平成30年度秋季特別展を開催いたします。関連企画として10月6日(土)、山口輝臣氏(東京大学准教授)を講師にお迎えし、第87回学習院大学史料館講座「思ふどち 語りつくして—乃木希典と寺内正毅」を実施します。本ミュージアム・レターをご覧頂ければ、日露戦争後の明治40年(1907)に第10代学習院長に任ぜられた乃木希典が、翌年の目白校地移転・全寮制教育開始をうけて「質実剛健」を旨とする教育をいかに実践してきたか、その様子がお分かり頂けると思います。

この特別展では主に学習院が所蔵する乃木院長の愛用品・関連写真・遺書その他を展示。関連講座では遺書宛先の一人である寺内正毅との関係に焦点を当てた専門的解説をお願いし、ご来館・ご参会の皆様方にお楽しみ頂けることと存じます。

あらためて館長として、霞会館、乃木神社、学習院アーカイブズ、および関係各位のご協力に感謝申し上げます。

(史料館長・坂本孝治郎)

まなやののぎまれすけ
学び舎の乃木希典

今年は、明治という時代が始まってから150年。明治10年(1877)、華族子女のための学校として神田錦町に創立した学習院が、明治41年(1908)に現在の目白校地に移転してからは110年となりました。

明治40年、学習院の第10代院長に就任した乃木希典は、当時、日露戦争で旅順攻略を指揮した陸軍大将として、多くの人びとから敬慕される存在でした。明治天皇からの深い信頼を背景に院長となった乃木は、みちのみやひろひと 迪宮裕仁親王(後の昭和天皇)をはじめ、皇族・華族の子弟らの教育に尽力してゆきます。

乃木の教育方針は人格形成を重視したもので、在任中にはさまざまな場面で学生へ向けて訓示を与えています。目白校地において中・高等学科に全寮制が採用されてからは、乃木は寄宿舎に起居して学生と生活をともにし、自ら範を示して指導にあたりました。その質実剛健を旨とした教育は“乃木式”ともいわれ、長く学習院の教育方針とされました。厳格ながらも学生から慕われた乃木院長のエピソードが、数多く残されています。

大正元年(1912)9月13日、明治天皇の大喪当日に、乃木は自刃しました。この「殉死」は社会に大きな衝撃を与え、明治の終わりを象徴する出来事のひとつとして記憶されました。院長を喪った学習院では、学生・職員によって通夜・追悼会が営まれました。

この展覧会では、学習院長乃木希典が、学習院で使用した品や、在任中に皇室から下賜された品、旧蔵の書籍、直筆の書などを、当時の写真や豊富なエピソードとともにご紹介します。軍人としてだけではなく、学び舎の乃木希典の姿をご覧ください。

(学芸員・吉廣さやか)

いさをある人ををしへの親にしておほしたてなむ やまとなでしこ

— 明治天皇御製 明治40年1月

日露戦争時、明治天皇は「西方の海みなはらからと思ふ世に など波風のたちさわぐらむ」の御製(天皇の歌)を詠んでいる。

明治38年(1905)1月1日、乃木希典が指揮する第三軍が、日露戦争の最激戦地となった旅順を攻略した。その報せを受けた明治天皇は、敵将ステッセルが祖国へ尽くした苦節を讃え、武士の名誉を保たせよとの命を下したという。乃木はこれに応えるべく「水師營の会見」において、報道撮影を控えさせ、さらにロシア軍将校らに帯刀を許した。会見では互いの勇戦が賞され、この時ステッセルは自身の駿馬・壽号を乃木に贈っている。

敗戦の将に対するこの異例の措置は、国内外の人々を驚かせた。乃木には各国から勲章授与の希望が寄せられ、この水師營の会見の様子は、その後唱歌として歌われ、教科書にも掲載されるようになった。

日露戦争後の明治39年8月、乃木は宮内省御用掛に任命された。その際の天皇の御沙汰には、学習院学生の教育は大変気にかかることとあり、特に乃木に命じて学習院の教育に参与させるとある。これに対し、乃木は就任後さっそく学習院の教育方針について意見書を出し、一度は廃止が決まっていた高等学科を存続へと導き、高等教育の充実を計った。

明治40年1月、乃木は学習院長に任命された。天皇は乃木に学習院の校風刷新を託し、現役軍人のまま院長を兼務させた。この際、乃木に下賜された御製「いさをある人ををしへの親にして おほしたてなむ やまとなでしこ」には、乃木を教育者として日本の未来を担う子供たちを育てたいという天皇の願いが込められている。

この頃は折しも^{とうきゆう}迪宮裕仁親王の学習院入学を控えた時期であった。入学にあたっては乃木と東宮職との間で検討がなされ、初等学科6年間の修学が決定し、その教育方針について覚書が交わされた。



「学習院高等学科卒業記念写真」 明治45年撮影
 (「乃木院長記念写真帖」(以下、「写真帖」)より)



乃木希典所用眼鏡
 【学習院アーカイブズ蔵】



乃木希典所用インク壺
 【学習院アーカイブズ蔵】

コラム

御神壇



大正2年当時の御神壇
 (「乃木院長記念写真帖」より)

御神壇は、明治43年(1910)に乃木が自ら設計し自費を投じて築いた「神域」である。目白の地に学習院が移転するにあたり、構内に神社を建て、崇敬の対象とすることを考えていた乃木が、国学者であり学習院の教授であった井上頼園(1839~1914)の進言により、『日本書紀』の「神籬磐境」に見立てて作り上げた。「神籬」とは、古代、神霊が宿っていると考えられた山や森、老木などの周囲に常磐木を植え、それらを玉垣で囲んで神座とした場所のことで、「磐境」とは、神を祀るために石を囲って設けられた神域のことである。

この「磐境」として作られた前方後円型の基壇は147個の石で構成されている。その内の80個は、乃木が当時の日本の国境から取り寄せたもので、樺太や千島、小笠原諸島の他、旅順や台湾、朝鮮半島などの石もある。現在も青々とそびえたつ神の木は、明治42年落成の新校舎に行幸した明治天皇が天覧した2本の神の内の1本である。乃木が最初に植えた1本は、明治天皇御不例(病)の頃に枯れ果てたため、後に残りの1本を植え替えた。これが今日の神であることとされている。

御神壇は、神祇を尊ぶ乃木の祈りが強く込められた場所であり、学生たちにとっては、襟を正して拝礼する学習院の聖域であった。現在も乃木の高風を追慕することの出来る場として、大切に守られている。昭和30年(1955)、東京都指定文化財。

(助教・柳澤恵理子)



寄宿舎で楽しむことをかぞふれば 撃剣音読朝めしの味

— 乃木希典詠 明治45年1月

明治41年(1908)、中等学科以上の学習院校地が北豊島郡高田村に移転し、9月に全寮制の寄宿舎が開寮すると、乃木は総寮部の会議室・寮長室をそれぞれ居室・寝室とし、学生との寄宿生活を開始した。翌年には院長官舎が完成するが、乃木は総寮部での生活を続けたため、この建物は^{大正2年}大正2年(1913)に正式な皇族寮(現在の東別館)が完成するまでその代わりとして使用された。

当時の学生や教職員の談話からは、乃木が日々学生との時間を大切にしていた様子がうかがえる。朝は掃除や食事を共にし、日中は授業の視察、夜の自習時には訓話や音読をし、剣道(撃剣)の稽古に付き合う。院長としての乃木の生活は大変忙しく、目白の学習院本院、四谷の初等学科、永田町の女学部に加え、宮中や陸軍(ステーション)を行き来する毎日であったという。移動の際は愛馬に乗るほか、目白停車場から鉄道を利用することもあった。乃木が馬を愛したことは有名だが、ステッセルから贈られた壽号の仔のうち一頭は「乃木号」と名付けられて明治45年から学習院で飼育され、昭和12年(1937)まで学生の馬術教育に貢献した。

学習院には当時、院長服や教官服という教員用の制服があったが、現役陸軍大将であった乃木は、学習院で過ごす際に常に軍服を着用し、寝るときもその上衣を脱いでシャツのまま横になっていたという。毎日、薬缶一杯の水で一日の洗面から手洗いまでを済ませ、学生もこうした乃木の行いを手本とした。

迪宮裕仁親王が初等学科に入学する前年、学習院長として拝謁した乃木が「今日の様に寒い時や雪などが降って手のこごえる時などでも、運動をすればあたたかくなりますが、殿下はいかがでございますか」と尋ねたところ、「ええ運動します」と答えられたという話もある。

生活を共にして自ら手本を示し、また学生たちの自主性を促し、彼らから「親父」と慕われた乃木の姿は、まさに明治天皇が御製に詠んだ「教えの親」であったといえるだろう。乃木が院長在任中に学生に与えた訓示の一部は、初等学科生向けの「乃木院長訓示要項」や「科訓」として、以後長く学習院の教育指針とされた。

(学芸員・吉廣さやか)



「総寮部に於ける院長使用の諸器物」
 大正2年撮影 (「写真帖」より)



「乃木号の手綱を手にせる院長」
 明治45年撮影 (「写真帖」より)

コラム

院長閣下のいちにち

学習院の朝4時半。総寮部の一室に起床した乃木院長は寝具を整え、塩で歯を磨き、冷水で顔を洗う。空の明らむまで読書をする、ゴムの長靴を履いて院内の散歩へ出る。携えるのは長柄の鎌。ここ高田村新校舎の敷地には森に池あり、草原も谷も竹林もある。院長は草を刈って枝を払い、学生たちの暮らす環境を安全に整える。栗の実を拾っているのは、小使へやるのである。朝食は7時。医務室を訪い、療養中の学生を見舞うと食堂へ入る。本日の食卓を朝夕共にするのは中等学科低学年寮の学生たちだ。好き嫌いや不作法には厳しくお小言である。味噌汁は今日も旨かった。

校舎の喫煙室で新聞を読みつつ教職員と歓談し、8時に授業が始まると院長室ならぬ主事室に入る。執務を終えると教場の参観に四谷の初等学科へ向かう。昨日は永田町の女学部へ赴いた。昼食の時間には目白へ戻って教員と昼食をとり、居間で書見。そして13時50分を前に、院長は軍服の上衣を脱いで白の防具に竹の胴を着ける。今日は中等学科1年の剣道の授業のある日だ。学生個々の気質を直接に知り指導ができるこの時間を、院長はこのほか大事にしている。元気よく竹刀をふるうよう叱咤激励し、気合が充実した一本には「参った!」と大声に叫ぶのであった。

15時の間食を学生たちと共にとると御用で外出し、17時の夕食前には帰院。食卓を見廻ると主菜が小ぶりの皿があったので自分の皿と取り換える。18時の自習喇叭が鳴り響くと、総寮部に戻って読書。読書はもっぱら音読で、外にも聞こえるほどの大音量である。自習室から学生が帰寮する時間には灯りを外に出しておく。22時の消灯前には各寮の周囲を巡回。寝台に横たわるやいなや院長は雷鳴のごとき鼾を響かせるのであった。

(EF共同研究員・戸矢浩子)

波風をはやくやすめて學び子の さちを守れや江の島の神

— 乃木希典 明治40年8月

明治40年(1907)8月、学習院の片瀬游泳場における夏季游泳に、乃木は学生の“精神修養”を目的として、天幕(テント)生活を導入した。游泳期間中、野外に設置された十数張の天幕で年長の学生を生活させ、自身も共に天幕で起臥し指導にあたったのである。これは、学生教育においては日本で初めてともいわれ、後述する英国のボーイスカウト精神との共鳴も、ここに由来すると考えられる。乃木に指導を受けた学生の一人であり、後にボーイスカウト運動を日本に普及させた三島通陽は、「日本の青少年の集団キャンプの元祖はこの乃木さん」であり、「片瀬で毎夏、少年と楽しいキャンプを共にして遊んでくれたことは、今けん伝されている生活指導教育の要素があちこちに見出される」と回想している。

游泳期間中に行われる遠泳は、習熟度別に、江の島周游〔一里〕、鎌倉遠泳〔二里〕、葉山遠泳〔三里〕とされていた。乃木はあまり泳ぎが得意ではなかったというが、学生が游泳している間は、常に浜からその様子を見守り、幼年の者には自ら指導をすることもあったという。

游泳場からは美しい富士が望め、明治40年には乃木の詠歌<仰ぎみれば 心もいと、すみわたる 朝日てりそふ 富士の神山>が書かれた絵葉書が記念として発行された。以降も游泳記念絵葉書は作成され、参加者に配布された。

また、明治41年の夏季游泳にあたって、乃木が学習院に寄贈した一艘の櫓舟は、学生により「桜染丸」と名付けられ、学生に囲まれる乃木の姿と共に写真(頁下)に見ることができる。



学習院游泳記念絵葉書 明治41(上)・43年(中・下) [当館蔵]

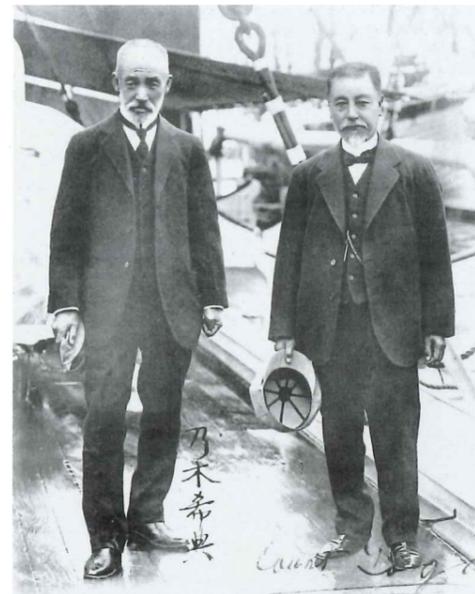


「游泳学生と共に写せる院長」 明治41年撮影 [当館蔵]



大そのの壁たつきはみたひらけく 青海原にさゝなみもなし

— 乃木希典 明治44年5月



「渡欧中東郷大将と共に写せる院長」 明治44年撮影 (『写真帖』より)

明治44年(1911)6月に行われた英国王ジョージ5世の戴冠式にあたり、同盟国であった日本からは、天皇の名代として東伏見宮依仁親王・同妃周子が参列した。その随行員の筆頭として、軍事参議官陸軍大将乃木希典と、同海軍大将東郷平八郎が同行することとなった。

渡欧前、乃木はドイツ・フランス・ロシア各国の駐日大使を訪問し、戴冠式後の視察の際に、各国の学校を参観できるよう依頼している。その際、乃木が「露国ノ貴族学校ハ世界ニ於ケル貴族学校ノ好模範タルヲ以テ是非参観シタキコト」と話したことからも、こうした海外での学校視察が、華族学校である学習院の院長として行われたものと推察できる。

戴冠式後、乃木は、英国の名門イトン校を訪れ、図書館や寄宿舎をはじめ校内の各施設を見て周った。また、別の日にはボーイスカウトの団を参観し、創立者のベーデン・パウエル中將らの歓迎を受けた。この際、天幕張り競争や救護演習などさまざまな競技に感動した乃木が、少年たちに演説する一幕も設けられた。

こうして、4月12日から8月28日の4ヵ月半にわたる海外渡航中、乃木は20校以上の貴族学校や士官学校を参観し、たびたび学習院に手紙を送った。



東伏見宮親王 東伏見宮親王妃 東郷提督と乃木大将

戴冠式記念絵葉書 3枚揃 明治44年発行 [個人蔵]

帰国後、乃木はボーイスカウトについて学習院の学生に講演し、この活動に明治41年の創立当初から興味を持っていたことを話している。現地で見学した競技の一つ“木銃教練”は、この後、明治45年4月から学習院に授業として取り入れられることとなった。

(学芸員・吉廣さやか)

コラム 乃木院長と同じ時を過ごした人々 — 西田幾多郎・鈴木大拙 —



明治42年頃の西田幾多郎(左)・大正8年学習院教官服を着用した鈴木大拙 [石川県西田幾多郎記念哲学館蔵・当館蔵]

乃木が院長であった明治42年(1909)、独逸語と英語の教授が学習院へ赴任した。白樺派の長与善郎に「二人とも至って風采の揚がらない、小柄な弱々しい人に見えた。」「揃ひも揃つて恐しく度の強い眼鏡をかけてゐる。」と記された独逸語教授とは西田幾多郎であり、英語教授は鈴木大拙である。のちに日本を代表する哲学者となる二人は、共に明治3年(1870)石川生まれ。石川県専門学校(後の第四高等学校)同級生は、目白の地で再会したのであった。

西田の授業は「教へる」ということは余り年頭にならしい。」という様子であったが、就任後1年で京都帝国大学へ転任した際には、学生が「西田先生の本院を去るゝと惜む」という文章を書くほど影響を与えた。その西田は乃木の死の報に接し、学習院文学部教授・田部隆次に「乃木さん御夫婦の自害は実に非常な感動を与えました。特に小生の如き僅か一年程とはいへ日々將軍に接し居りしもの風貌今尚眼前に彷彿たる様に思はる。貴兄など尚更のこと、思ふ。あの様な真面目の人に対して我らは誠にすまぬ感じがする。(中略) 近来明治天皇の御崩御と將軍の自害ほど感動を与へたものはない」と書簡を送っている。一方の大拙は、大正10年(1921)まで奉職。寮長を務め、海外修学旅行の引率も行った。乃木院長が授業を視察しに部屋へ入ると、大抵の先生は急に襟を正して語調も変わったが、大拙だけは話しぶりも態度も少しも変らなかつたという、大拙らしいエピソードが残っている。

(学芸員・長佐古美奈子)



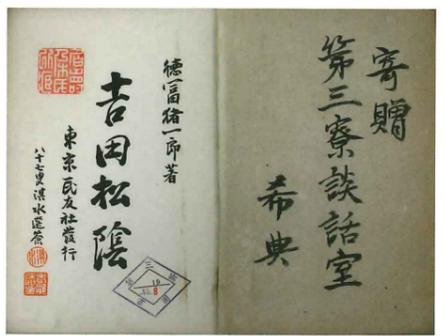
中朝事実：昭和天皇に受け継がれた教え

乃木希典からの寄贈書

乃木は若くして、玉木文之進(1810～1876)に師事し、山鹿素行(1622～1685)や吉田松陰(1830～1859)に私淑していた。玉木は山鹿流の兵学者であり、また松陰の叔父でもあったからである。なお乃木の実弟が玉木の養子となったので、乃木と松陰は親戚関係にあったともいえる。本稿では乃木自身、およびその遺族が学習院に寄贈した素行、松陰にかかわる書物を2冊紹介したい。

❖『吉田松陰』

明治26年(1893)、徳富蘇峰(1863～1957)が著した吉田松陰の伝記。その表紙見返しには、「寄贈／第三寮談話室／希典」とある。「第三寮」は、目白校地の竣工当初より建てられていた学生の寄宿舎(第六寮まであった)の一つ。乃木は、自らが私淑する吉田松陰について、広く学生に知らしめるべく、該書を寄贈したのである。



『吉田松陰』〔学習院アーカイブズ蔵〕

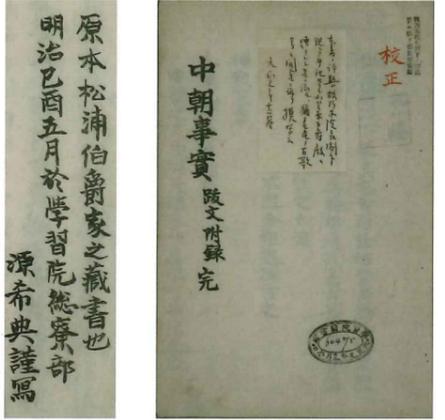
❖『中朝事実』

『中朝事実』は、江戸時代初期の儒学者、山鹿素行が著した歴史書。儒教のいう「聖人の教え」が実践されているのは、万世一系の皇統を有する日本であって、我が国こそが「中朝(中華)」と称するにふさわしいと提唱する。

乃木希典はこれを座右の書とし、戦地にも携行していた。明治42年(1909)、乃木は「総寮部」(現・乃木館)において、その全文を手写し、それを石版印刷のうえ自費出版した。またこの書は、『中興鑑言』(下のコラムを参照)とともに、明治天皇の大喪に際して、乃木が自刃する数日前、通宮裕仁親王に献呈したことも知られている。

そもそも乃木は、裕仁親王の初等学科入学を見据えて、学習院長に任ぜられた。したがって学習院長としての乃木は、裕仁親王の成長とともにあったとも言える。乃木は裕仁親王への最期の教えとして、皇室を中心とした日本の伝統を伝える意図のもと、これらの書を奉獻したのである。

昭和天皇(裕仁親王)は晩年になっても、自分の人生において最も影響を受けた人物は乃木であると語っている。この『中朝事実』には乃木直筆の朱批が施され、末尾に和歌2首が書きつけられている。加えて「小笠原長生(1867～1958)に贈呈されたものであろう。さらに該書の冒頭には「故乃木院長閣下ノ御遺言ニ依り伯爵家寄贈」とあり、また「大正元年(1912)12月6日」の受入印が捺されていることから、乃木の死後ほどなく学習院に寄贈されたものと窺える。



『中朝事実』〔学習院大学図書館蔵〕

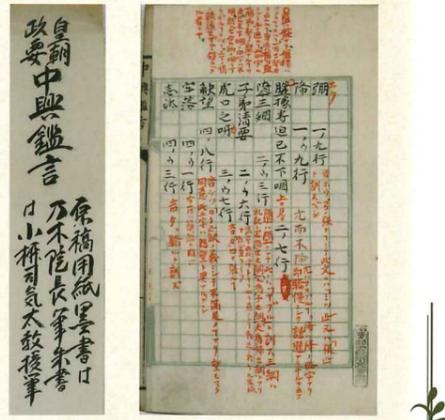
(客員研究員・中嶋諒)

コラム 乃木希典と小柳司気太

江戸時代中期の儒者、三宅観瀾(1674～1718)が著した『中興鑑言』もまた、乃木が手写し、自費出版した書物である。これは建武中興における後醍醐天皇の得失を批評したものであるが、学習院大学図書館には、乃木旧蔵の江戸期の版本も収められている。

さて該書で注目したいのは、乃木が、当時学習院教授であった中国哲学者小柳司気太(1870～1940)に宛てた原稿用紙が添付されていることである。ここでは乃木の疑問点が墨書で、それに対する小柳の回答が朱筆で記されている。小柳は乃木の死後、「余は是まで色々校長の下にあつたが、コンナ勉強家は、未だ見たことはない」(『丁酉倫理会倫理講演集』122、1912年)と述べているが、その言葉通り、乃木の学問に対する姿勢には目を見張るものがあつた。

(客員研究員・中嶋諒)



『中興鑑言』添付の原稿用紙〔学習院大学図書館蔵〕



明治の終焉と乃木希典が遺したものの

うつし世を神さりまし、大君のみあとしたひて我はゆくなり

—乃木希典 辞世の句



渡辺長男原型制作／岡崎雪聲鑄造 乃木希典胸像 大正元年〔学習院アーカイブズ蔵〕

明治45年(1912)7月、明治天皇の御不例を知らせる電報を受けて、乃木はすぐさま宮中へ参内し、以降日々参内を続けた。天皇の崩御にともない、7月30日、元号は大正と改められた。

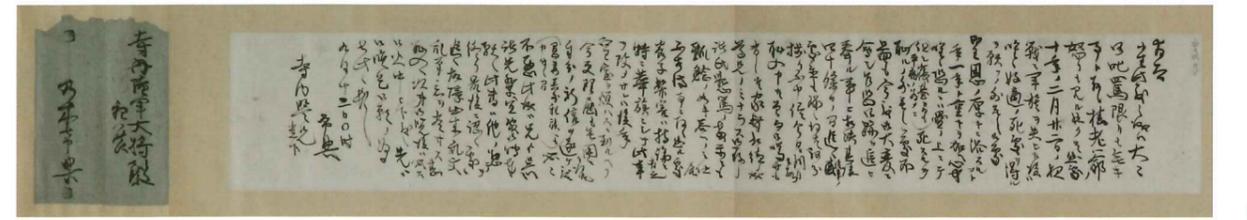
大正元年9月13日、明治天皇の大喪儀が青山練兵場において行われた。午後8時、明治天皇の棺が宮城から出発する号砲とともに、乃木と妻静子は赤坂の自邸において自刃したといわれる。その報せはすぐに青山と学習院にもたらされ、まもなく号外が配られ、翌日からは新聞各紙が大きく報じた。この自刃は「殉死」とも称され、多くの人々に衝撃を与えた。

乃木邸での通夜は大変な混雑で制限が敷かれたため、学習院学生らは乃木が起居した総寮部で通夜を行った。葬儀の当日、葬列には学習院の学生らも棺に従い、あるいは勲章奉持者の付き添い役などを務めた。皇族や、来日した英国のコンノート親王など多くの会葬者が訪れる中、荘厳な式が執り行われた。

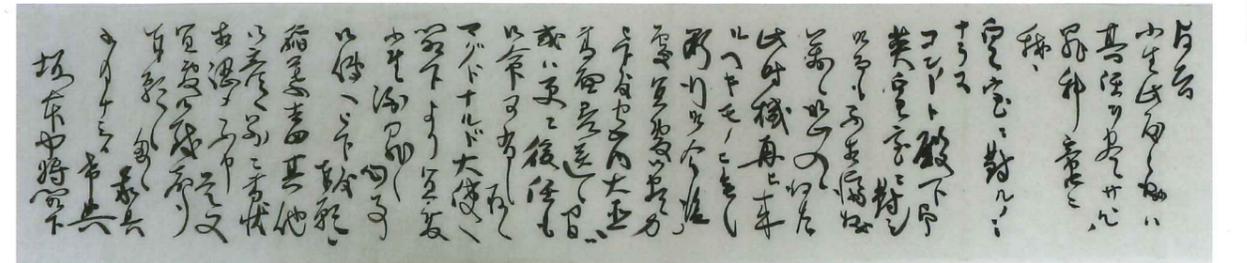
乃木の没後は、全国に乃木神社が建立されるなど、乃木の顕彰活動が起こり、学習院では『乃木院長記念録』や『乃木院長記念写真帖』が編纂された。

乃木は自刃にあたり、親族や陸軍・学習院関係者らに宛て、複数の遺書を書きのこしている。その遺志により学習院には、乃木の院長在任時の皇室からの下賜品や、愛用品・図書などが寄贈された。これらの品は、当時の学生や教職員が語るエピソードとともに、教育者としての学習院長乃木希典の姿を、確かな輪郭をもって描きだしている。

(学芸員・吉廣さやか)

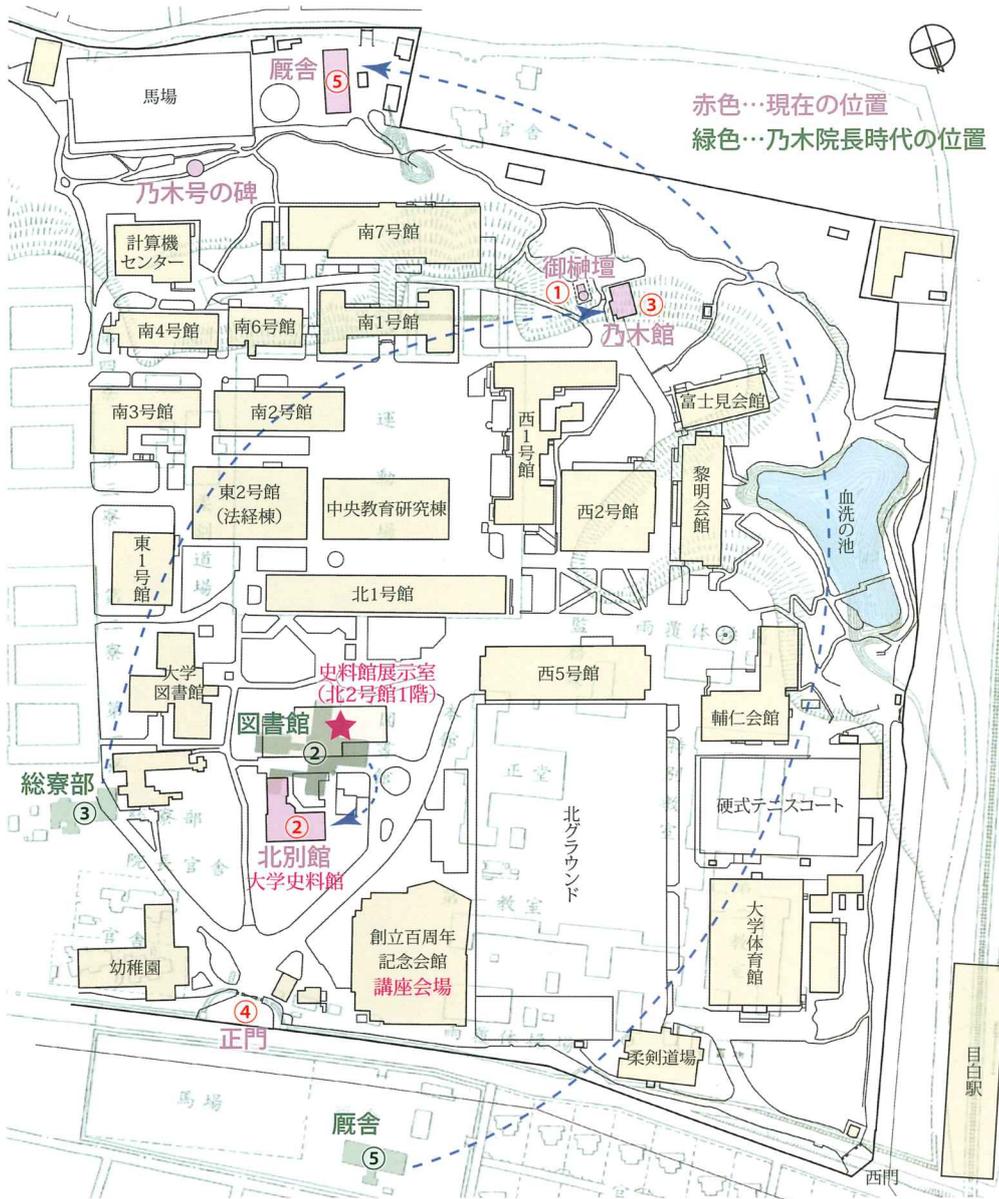


乃木希典筆 寺内正毅宛遺書 大正元年9月12日付〔当館蔵〕



乃木希典筆 坂本篤俊宛遺書 大正元年9月13日付〔当館蔵〕

現存する乃木院長時代の建造物マップ



①御神壇



明治43年(1910)築造

②北別館(旧図書館)



明治42年(1909)竣工
昭和54年(1979)移築

③乃木館(旧総寮部)



明治41年(1908)竣工
昭和19年(1944)移築

④正門



明治41年(1908)竣工

⑤厩舎



明治41年(1908)竣工
昭和2年(1927)移築

(リ)サーチアシスタント・西山直志

学習院大学史料館からのお知らせ 平成30年度秋季特別展 「学び舎の乃木希典」展

【主催】 学習院大学史料館
【共催】 一般社団法人 霞会館
【協力】 乃木神社、学習院アーカイブズ
【会期】 平成30年9月13日(木)～12月1日(土)
開室：月～土曜 10:00～17:00
11/3(土・祝)・4(日)・23(金・祝)
閉室：日曜、祝日、10/19(金)・20(土)、11/1(木)・5(月)
【会場】 北2号館1階 学習院大学史料館展示室 *入場無料

【関連講座】 第87回学習院大学史料館講座 「思ふどち 語りつくして —乃木希典と寺内正毅—」

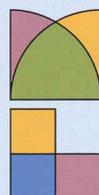
講師： 山口輝臣氏(東京大学准教授)
日時： 平成30年10月6日(土) 14:00～15:30(終了予定)
会場： 学習院創立百周年記念会館正堂
*入場無料 事前申し込み不要

【ギャラリートーク】
10月13日(土)、11月3日(土)
いずれも14:00から30分程度、展示室内にて
*事前申し込み不要

※乃木院長時代(1910年)の目白校地地図(緑色)に、最近(2017年時点)の目白校地地図を重ねた。
※②～⑤はいずれも久留正道設計、平成21年(2009)国登録有形文化財。
※各建造物とほかの文化財の詳細は、当館編『学習院 目白の学び舎』(2010年)、もしくはミュージアム・レター特別号(2017年7月改訂)をご覧ください。

ミュージアム・レター第38号

平成30年(2018)9月10日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03(5992)1173
FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

●ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>